

私はお茶大のすぐ南側の小日向二丁目の住宅地で生まれた。昭和4年のことで、当時は東京府東京市小日向台町一丁目と呼ばれていた。小日向という地名は江戸時代初期にすでにあったが、今の江戸川橋辺りが中心だった。江戸の町が拡大し、小日向台の上にも侍屋敷や小さな小日向台町と呼ばれる町屋ができた。そのすぐ北側には安藤長門守の下屋敷があったが、明治以後、長く陸軍用地となっていた。小学生の頃、この陸軍施設は移転し、荒地となっていたところもあったが（今の筑波大付属中高）、東京女子高等師範学校はもうここにあった。関東大震災で御茶ノ水で焼けて後、昭和7年にこの大塚の地に新しいキャンパスをオープンさせていたのだ。

震災後、この陸軍用地を分割して、その北半分を女高師が使うことになったのだが、正（東）門のある市電通り（現春日通り）の向かい側にあった大塚窪町の住民は、陸軍用地の全面的宅地化を求めた。妥協の産物として、市電通り沿いの20メートル幅の土地はキャンパス外となり、僅かに正門だけが大通りに面するという形になった。この細長い土地に、その後の曲折をへて、戦後になって桜蔭会館などが建てられた。

戦争中、中学生だった私たちは、女高師正門前やや右手で建物強制疎開に動員された。都電通り

から直角に東京文理大・高師の裏手にかけて建物を連続的に引き倒し、防火帯をつくった。しかし、これはあまり効果がなく、終戦の年の5月25日夜の最後の空襲でまわりは延焼で焼けてしまったが、仲町寄りの一部は女高師の風下側となり助かった。

戦後、東京は壮大な道路計画を建てた。茗溪会館の前から斜めに広い道がつくられ、下に地下鉄丸の内線が建設された。強制疎開の跡地は、ほとんど家が建った。茗荷谷駅の前の都電通りは東側が拡幅されたので、今もほぼ昔の形で残っている女子アパートは数メートル東へ移動させられた。窪町小学校の敷地の一部もけずられた。

戦時中、女高師裏にはまだたくさんの弾薬庫用の土手が残っていた。道路反対側の中学の生徒だった私たちは、そこで時々草滑りをして遊んだ。今の文京七中のところである。音羽へ抜ける峡谷状の切り通しの道は戦争中につくられた。それまでは音羽へ出るには跡見の前を通過して、ねずみ坂という急な坂を使っていたのだ。東京有数の急崖の音羽の東斜面は、こうして自動車・消防車・軍用車が通れるようになった。低い2階屋が連続して小日向台から見おろされていた音羽の街は、現在は拡幅をともなって高層ビル・アパートの街となり、小日向台の住宅地を見おろすようになった。

千歳先生のプロフィール

井内 昇

千歳壽一先生は大学の地理学科で私の1年先輩でしたから、おつき合いはもう40年以上になります。この間に僅か2年間でしたがお茶大地理学科と一緒に働いたことは、私の社会人生活の中で忘れられない思い出の一つになっています。

1990年の秋、「情報学」担当の久保先生の他大学への転出が急に決まり、「情報学」所管の地理学科は急いで後任者を探すことになりましたが、それには諸般の事情から多くの困難が予想されました。そういう中で、それまでお茶大地理学科とはご縁がなかった千歳先生の名前が候補者の中に浮かび上がったのは、先生が地理学出身の数少ない計画行政の専門家であると共に、コンピュータ関連業務でも優れた実績をお持ちだ

ったからです。今でこそコンピュータの達人は大勢いますが、千歳先生はすでに60年代前半から都庁の行政事務処理のコンピュータ化に取り組み、その後もコンピュータ関連の行政・研修等の分野で活躍してこられました。一方、本来の仕事である大都市圏計画の分野では、東京大都市問題企画・調査部門のチーフとして、お手のもののコンピュータを縦横に駆使して多くの調査結果をまとめあげられました。このような都庁のコンピュータ関連の諸分野での活躍と共に、大都市問題の計量地理学的研究により理学博士号を授与された経歴から、「情報学」担当の適任者としてお迎えすることになりました。

お茶大着任後の千歳先生の地理学科及び大学

への貢献については、今さら云うまでもありません。学内での活躍の状況はお聞き及びと思います。が、学外での千歳先生のお仕事を会員の皆様は余りご存じないかも知れません。しかし、地理学、及び環境情報学、都市計画学、計画行政学等の関連学会の専門委員会で、60才を越えても千歳先生のように現役として活躍中の方は稀です。この幅広い活躍が学生たちの関心領域を広げたことは、千歳ゼミの学生の卒論テーマからも読み取れます。91年の大学設置基準の大綱化に伴う大学改革の進展の中で、全国の大学地理学教室は対応を迫られました。千歳先生はお茶大地理学科の将来のあり方を熱心に検討・熟慮され、私にまで意見を求められたことがありました。

千歳先生は性格が明るく温厚なお人柄で、学生時代から友人に信頼されてきました。お茶大でも学生諸君に人気があったと聞いています。学会誌37号の随筆欄への寄稿「『私のモーツァルト紀行』の空間」からもその一端がうかがわれますが、千歳先生は音楽・美術・文学等幅広い趣味の持主です。特に音楽は、学生時代に元文教育学部長の徳丸先生と共に、東大オーケストラの主要メンバーとしてヴィオラパートで活躍されたように、自らも演奏を楽しまれる本格派です。退官後もまだ仕事から解放されないかも知れませんが、どうか健康に留意され、幸せな人生を送られるようお願いいたします。千歳先生、どうか何時までもお元気で。(1999年2月)

千歳先生の思い出

新 井 桂 子

平成3年4月1日、当時地理学教室に助手として勤務していた私は、当日着任予定の千歳先生を助手室でお待ちしていた。そして、10年前、千歳先生と初めてお会いした時のことを思い出していた。

昭和57年の春、学部4年生で卒論を準備していた私は、都市気候をテーマとして、都市内部の土地利用の差異による気温への影響を考察しようとしていた。東京都をフィールドに考えていた私は、卒論の副指導をお願いしていた井内昇先生のご紹介で、当時東京都の都市計画局企画調査課課長でいらした千歳先生をおたずねしたのである。

その時、千歳先生のいらした部署はJR有楽町駅に近い庁舎にあり、教えられてきた部屋に入った時、西からの太陽の光を背にして席についておられた先生の姿が、シルエットのように浮かんでいた光景を印象深く記憶している。そして、私は「23区内の道路の被覆状況を知りたい」というようなことを申し出て、道路課の方を紹介していただいた。

以来お会いする機会もなく10年が経過していたのだが、お顔とお名前は記憶していたので、その方がお茶大に着任されるとかかがい、思いがけない偶然に驚いていたのである。

平成3年に着任された後、しばらくして、先生に卒論でお世話になったことをお話ししたら、「すっかり貫禄がついたので」覚えていらっしゃるのとのことだった。

それでも私の方はご縁があったのだと勝手に解釈し、助手として勤めていた私にも細かな心遣いをしてくださる先生に、その着任1年目で助手を退職することが決まった後の進路についてご相談させていただいた。

退職後は博士課程に入学したものの、転居・出産等のため思うように大学に出られなくなり、先生とゆっくりお話する機会もないまま瞬く間に6年が経過した。

そして、先生が今年度いっぱいでご退官とうかがいがい、お茶大でお会いできるチャンスはもう少ないと思い、昨年夏、先生の研究室をおたずねした。私の研究テーマが、都市をフィールドとした農業に変わっていたので、長年、都市計画に携わってこられた先生に都市計画の立場から見た都市農業についてアドバイスをいただきたくもあった。

しかし、その時のお話は、私が予想していなかった方向に進んだ。先生は、ご自分の子供の頃のお話からお母様の子育てのことに触れられ、成長期の子供にとって母親の工夫と愛情に満ち